

ワンポイントより

① 人間の知性は衰退をはじめたか？－経済協力開発機構の「学習到達度調査」結果－

AIが登場して以来、読解力・数学・科学の能力が下降。12～18年には大幅な落ち込みで、思考力・問題解決能力は成人も同様の傾向。オンライン情報で、活字離れの結果か。

② 報道姿勢を問う。人権基準・自由主義の立場からではなく、科学の基準で報道すべき。

*香港をめぐる対中国批判は、介入の要件(相手国が求めている。自国に介入能力がある。国際的に承認されている。)を充たさず、人権介入は「内政干渉」にあたる。「香港 国家安全条例施行から1年・言論かつてない打撃」(‘23, 3, 23『赤旗』)－でよいのか？

*トランプ相互関税－自由貿易に立ち戻れ、(’75, 4, 4『赤旗』)ではなく、科学的社会主義の立場で、米主導のこの間30年間の経済の動きを総括すべき。

第2篇 資本の回転

第15章 回転時間が資本前貸しの大きさにおよぼす作用

第5節 価格変動の影響 — 資本の遊離(資本が余る)、拘束(資本不足)がおきる。

第16章 可変資本の回転

可变的流動資本(v)の運動の独自性。不変資本の価値移転とは違い、各回転の生産ごとに、vは再生産され、同時にmを生む。だから、回転速度の大小が可変資本・剰余価値に影響を及ぼす。→mが生産からではなく回転(流通)から生じるかのように見え、源泉を隠微。

1年間に生産される剰余価値

剰余価値年率＝ $\frac{\text{1年間に生産される剰余価値}}{\text{前貸し可変資本}}$ ＝ 剰余価値率m' × 可変資本の回転数n

*10回転する資本は10倍の大きさの資本と同じはたらきをする。

*vの規定がいかに大切か。vの大きさがしっかり確定して、mの大きさが算出できる。

*vは労働力の再生産費 (vは力関係で決まる、のウソ。vゼロにも、mゼロにもできない。)

【注 32 有名な資本主義むじゅん論】〔マルクスの覚え書き〕－【恐慌の根拠】

「商品の買い手としての労働者は市場にとって重要である。しかし、労働力商品の売り手としては、価格を最低限に制限される。剰余価値の実現は社会一般(どんな社会でも該当)の消費欲求ではなく、大多数がつねに貧乏である社会の消費欲求に限界づけられている。」

【恐慌の可能性・必然性】

可能性: 売り・買いの分離。〔①貨幣の仲立ちによる。②債務・債券(信用・クレジットなど)〕

必然性: 資本主義生産のしくみによる。(第3巻, 「利潤率の傾向的下落の法則」)

第17章 剰余価値の流通 第1節 単純再生産

単純再生産でも、mの流通のために、mの一部分は貨幣形態で存在しなければならない。

「資本家はどのようにして、流通に投げ入れたより多くの貨幣を流通から引き出せるか？」

*問題は貨幣の形成ではなく、mの貨幣化の貨幣はどこから来るか？－解答は再生産論。

マルクスの理論的未成熟の残滓

- ① 「500ポンドが労働力に支出されてしまった。もともと前貸し総資本の一部分であったこの500ポンドは資本であることをやめてしまっている。それは労賃に支払われてしまった。」(新版490. 第2段落3行目・新書 488.2 行目・ドイツ語311)→資本をやめる？
- ② 「資本が次々に労賃に支出され、この労賃はふたたび労働者たちによって生活手段に支出される。こうして前貸しされた 500 ポンドの資本は、消費されている。それはもはや存在しない。」(新版 492. 1 行目・新書・489、8 行目・ドイツ語312前)→資本がなくなる？
- ③ 「後者(資本)は消費され、労賃に支出されてしまっている。」(新版 4925 行目・新書 489、後ろから 6 行目・ドイツ語 312)→資本が労賃に消費(前貸しではなく)？・無くなる？
- ④ 「労働者は・・・自分が買う生活手段を自分の手の中で流通手段に転化した可変資本で支払う。」(新版 499、第 2 段落 2 行目・新書 497、2 行目・ドイツ語 317, 11 行前)→労働者が資本で支払う？

エンゲルス『序言』より

第 2 篇は 1870 年代の「第 2 草稿」からできている。A・スミスのドグマの影響(「価値の自立」の把握が未確立・「資本—収入」の影響)が色濃く残っている。マルクスは、自分の余命を自覚し、どうしても書き直しの必要と思われた、第 1 篇「資本循環論」と第 3 篇「再生産論」を懸命に書き上げた。「意気阻喪させる病状としゃにむにたたかった痕跡があまりにもしばしば見られる。」(『序言』)

マルクスは、スミスのドグマの残滓を自覚しながらも第 2 篇には手が付けられないまま、力尽き、世を去る。エンゲルスは、編集方針(「マルクス自身の著作」)に基づき、残された第 2 草稿(これしかマルクスの記述はない)により、『資本論』を仕上げた。スミスのドグマの残滓はそのままにならざるをえなかった。

『第 2 巻』の読み方

後世の読者は、以上のことを理解し、マルクスの理論発展の歩みをたどりながら読まなければならない。それがエンゲルスの編集に際して読者に託した願いである。『序言』に、マルクスの遺稿とマルクスの健康・病気の状態、並びに自身の編集方針について詳しく書き記した由縁である。

「新版『資本論』で、そのことに全然触れず、『残滓』に『注』を付けないでそのまま編集されているのは極めて残念である。」(宮川先生)